

ウィリアム・ブレイクの喜劇性*

山崎 有介**

William Blake as a Comic Writer

Yusuke YAMAZAKI

キーワード：ユートピア文学、悲劇と喜劇、ロマン派、批判精神、諷刺

概要

アリストテレスの「喜劇論」が失われたのはある意味では必然的な社会の意図的な操作であったのではないだろうか。喜劇とはユーモアであると同時に皮肉が込められている諷刺劇であり、時代の政治的動向により反感を買うこともその喪失の可能性として有り得たかも知れないからである。また、シェイクスピアにとってもその作品から覗えるように、悲劇と喜劇は表裏一体であり、特に喜劇の中に神秘性が潜んでいると考えられる。それゆえに特に喜劇において微妙な感性が芸術家の才能として表現されていると言えよう。その意味でウィリアム・ブレイク(1757-1827)の『月の中の島』(*An Island in the Moon*, c1784)という作品は喜劇作品としての伝統を維持していると言えよう。更に『無垢の歌』(*Songs of Innocence*, 1789)から『無垢と経験の歌』(*Songs of Innocence and of Experience*, 1794)への変遷、*Four Zoas* (「聖書」ではなく四つの生き物)の誕生があり、一連の『預言書』の中で語られ、そのモチーフが実は初期作品から後期作品までの各段階で微妙に変化し、人間の内面性への皮肉が一貫した形で諷刺作品という形態を生み出しているのである。そして、興味深い点はブレイクは戯曲家あるいは物語作家として作品を書こうとしていたのではないか、という点である。後期預言書は形式的には叙事詩ではあるが物語詩であり、ある意味では戯曲である。その原点としての『月の中の島』は詩人としてのブレイクの顔はもちろんであるが、諷刺作品としてのギリシア喜劇やシェイクスピアの喜劇、スウィフト諷刺物語、ロマン派の人間性への追求を訴える作品へと繋がる流れの中で、喜劇作家として役割も見せてくれているのである。

Contents

1. イギリス文学の諷刺作品：ユートピア物語
Utopia (Thomas More, 1516)
Laputa (Jonathan Swift, 1726)
* *An Island in the Moon* (William Blake, 1784)
* *Xanadu* (Samuel Taylor Coleridge, 1797)
Brave New World (Aldous Leonard Huxley, 1932)
Nineteen Eighty-Four (George Orwell, 1949)
etc.
2. ブレイクの喜劇性
John Milton の *Paradise Lost*
→ *Milton* → *Jerusalem*
Swedenborg の *Heaven and Hell*
→ *The Marriage of Heaven and Hell*
* 悲劇を喜劇(諷刺劇)への転換：アリストテレスの「喜劇論」が失われた理由の一つ
3. 喜劇としての『月の中の島』
 - ・ サミュエル・フット作 喜劇『ヘイマーケットでのお茶』(1747年)のパロディ。
 - ・ ボズウェルの『ジョンソン伝』の中でフットのことが言及されている。
 - ・ ジョンソン曰く、フットの劇は「特定個人をものまねする笑劇」である。
 - ・ コリンズの『夕べの賦』
 - ・ ポープの『人間論』
 - ・ ヘンリ・フィールディング『クラブ街オペラ』「古きイングランドのロースト・ビーフ」
 - ・ キッドとサクシヨンの掛け合い漫才
4. まとめ：批判精神とナンセンス文学

* Received March 15, 2007

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 国際交流科, Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1057 Eida, Isahaya, Nagasaki 854-0081, Japan

1. イギリス文学の諷刺作品

イギリスの諷刺文学の代表的な作品トマス・モアの『ユートピア』(Utopia, 1516)の中にはプラトンのへの言及が度々見られることから、プラトンの『国家』、『ティマエオス』や『ノモイ』にヒントを得ていることがよくわかる。特に共産主義について描いているが、モアが共産主義国家を理想郷と考えていたのではなく、むしろ皮肉を込めて、あるいはユーモアを込めて諷刺していたものであることもイギリス文学者の中では常識となっている。そして、このユートピア文学 (utopian literature) = 反ユートピア文学 (dystopian literature) は現代まで絶えることなく続いている。フランシス・ベーコンの*The New Atlantis* (1626)、ドリス・レッシングの*The Canopus in Argos* (1979-)、そして21世紀の様々な現実逃避作品、SF小説へと。それぞれの理想郷は、次の通りである。

・ Thomas More : *Utopia* (1516)

すでにオーストラリア大陸を予言していたかのように、当時のヨーロッパ人はユートピアが、南アメリカの沖に位置していることや、他の大陸(ここでは南アメリカ大陸)から分離したものと信じていた。ユートピアは内海を有する島国とされている。裕福な農業国で、商工業も発達しており、貧困とは無縁の国である。宗教的には寛容で、異なった信仰が共存している。ユートピア人は大きく2派に分かれ、一方は独身で菜食主義派であり、現世を捨て来世を待ち望む者たちであり、もう一方は結婚生活を前提とし生殖を人類の義務であると信じる者たちである。それぞれはお互いを理解し、共同体意識に根ざしている。しかしながら、社会生活において個人的なことは一切なく外交的で、公的なものである。従って、私有財産もない。私的な生活を好むと奴隷とされる。軍隊は好戦的である。

・ Francis Bacon : *The New Atlantis* (1626): ベンサレム

南太平洋上のソロモン群島の海域なる島国。紀元50年頃天より巨大な光の柱が近づき、そこから櫃が現れ、旧約・新約聖書と聖バルトロメオからの手紙「我れ神の命によりて櫃を海に委ねん。櫃の流れ着きぬ国の民に救済はきたるべし」が納められていた。それ以来、ベンサレムは、キリスト教を奉じている。階級差が一切なく、受胎調整が行われ、常に総人口は200万人、一つの町の人口は4万人である。エネルギー

源は無限で、土地は国有。なにもかもが理想的な島国のように見えるが、あらゆる者が整備され、秩序付けられ、法律は厳しく、人々は気づかぬまま束縛の中で生きている。

・ Jonathan Swift : *Gulliver's Travels* (1726)

第3部「ラピュータ」で、ガリバーはホープウェル号に乗って空飛ぶ島ラピュータを訪れる。あらゆる学問を司る学者たちの住む島であった。しかしながら、そのあらゆる学問が無駄な時間を費やした無意味なもののように読者には思えるが、ガリバーには凡人の及ばない不思議な世界に見えるのであった。スウィフトは18世紀、世界の大国に申し上がったイギリスを皮肉を込めた諷刺作品として描いた。理性と欲望、善と悪、人間と動物、知恵と無知、あらゆる対立物の価値観が覆される描写は、子どもにとっては童話となり、大人にとっては読解力への挑戦としてその寓意性が求められる作品となっている。

・ R M Ballantyne : *The Coral Island* (1857)

南太平洋に浮かぶほぼ円形の島で、円周は約30マイル、直径は10マイルほど。島の海岸は真白な砂浜で、三つの狭い切れ目のある珊瑚礁が周囲を完全にとりまいている。島の植物類は数も種類も豊富だが、動物はきわめて少ない。この島は、魅力に富んでいるけれど、食人種と海賊の攻撃をうけることがあるので、旅行者は注意しなければならない。いざというときには「ダイヤモンドの洞窟」と呼ばれる、水晶の壁をもつ海面下の洞窟に避難することができる。(『架空地名大事典』より)

・ Samuel Butler : *Erewhon* (1872)

エレホンはNowhereの綴りを逆にして作った仮想上の国の名前である。主要な学問は仮説学であり、法律は病気までも犯罪にしてしまうほど厳しいものである。見聞記という形式で書かれたユートピア的物語であり、宗教、教育、進化論、親子関係、機械文明など近代社会に対する諷刺文学である。アイロニーが各所で見られ、この作品のおもしろさは読む側の読解力に掛かっているといつてよい。

・ William Morris : *News from Nowhere* (1890)

22世紀のロンドン、そこには革命はなく、テムズ川は清く、「喜びとしての労働」に従事する人々。理想的社会が目当たりであり人々の姿は活気にあふれる。労働者が資本家に搾取されず、機械だけでなく人間の手で作られた優

美な日用品に囲まれたユートピア的な世界が描かれていて社会主義の理想が描かれている。

・ Harvard George Wells : *A Modern Utopia* (1905)

人類の進歩は、科学文明の進歩であると信じて止まない人間の姿はどんどん墮落の道へと進んでいく。科学文明の弊害と恐怖が当時の読者にはそれほど身近なものではないかも知れない。しかしながら、彼の代表作『タイムマシン』、『宇宙戦争』、『透明人間』などと今日のSF作品、思想にまで影響を及ぼすサイエンス・フィクションの創始者とまで言われるウェルズが描く反ユートピアの世界である。

・ Aldous Leonard Huxley : *Brave New World* (1932)

近代科学技術上人間にとって最も身近なものとなっていく自動車の発明が始まって632年、ヘンリー・フォードが造った技術は譬えれば神の創造そのものとなり、人類にとって共同生活、帰属意識、安全性と観念が主流になり、個人、性愛、道徳、宗教、芸術はもはや無縁のものとなっていた。科学的理性こそが絶対的なものであった。

・ George Orwell : *Nineteen Eighty-Four* (1949)

「ビッグ・ブラザー」と呼ばれるスターリン的（ヒットラーと結びつける者もいる）な絶対的指導者のもとで、オセアニアという全体主義国家が思想統制、洗脳、事実の捏造も「秩序」という野本にを事も無げに成し遂げる。主人公ウィンストン・スミスとジュリアという女性との恋愛も国家体制からの脱出も全てがビッグ・ブラザーによるシナリオ通りのものであった。ウィンストンは拷問されながらも洗脳され、ジュリアを裏切ることになる。やがて、ビッグ・ブラザーの名の通り大いなる友となっていく。オーウェルが述べるここでの「秩序」は彼自身が言う「サディズムとマゾキズム、成功崇拜、権力崇拜、そして全体主義の相互関係」であり、民主主義の理念とは対極のものである。

・ William Golding : *The Lord of the Flies* (1954)

飛行機事故で無人島に漂着したアメリカ陸軍幼年学校の生徒たちは、はじめ、島の生活を楽しんでいて、やがて救助を待つリーダーを中心とした一派と、自然に同化しながら狩猟に駆り立てられていくものたちの一派に分かれ、対立していく…。第2次世界大戦の最中、南太平洋の孤島で繰り広げられた殺戮の場に、飛行機で不時着した少年たち。だが、その島で、人間

の残酷な性にめざめ、少年たちは殺人を繰り返すことになる。旧約聖書に登場する悪魔の異名を持つ「蠅の王」を象徴的に、狂気の時代に生きる人間のあり方を諷刺した作品。

・ Doris Lessing : *The Canopus in Argos*

Vols. 1-5 (1979-1983)

その星はかつて「多産」や「繁茂」を意味する「ロウハンダ」と名づけられ、様々な生物が調和して生息し、アルゴ座のカノープスのコロニー中いちばん豊かで驚嘆していた。それがどういふわけか、エネルギーのバランスが狂い、生物が互いに殺戮しあう野蛮な星となって、「痛めつけられ、損傷を受け、傷ついたもの」を意味する「シカスタ」と呼ばれるようになった。カノープスからシカスタへ多くの使者が送られ、この墮落した星の再生がはかられる。その使者のうち最も重要な使命を帯びていたのは、ジョホーア（ジョージ・シャーバン）だった。「アルゴ座のカノープス」連作の第一巻「シカスタ」は、このジョホーアの報告書を中心に、シカスタの繁栄から没落が描かれる。『シカスタ』は「アルゴ座のカノープス」連作の第一巻として、1979年に発表された。現代の英国文壇を代表する女流作家レッシングが、SF的な枠組を借りて、宇宙的視座から地球を描いた本書は、発表と同時に激しい賛否両論の渦に巻き込まれ、特にSFサイドからは強い批判が寄せられた。しかし、もちろん本書はSFあるいはファンタジーといったジャンルに属する小説ではなく、一つの寓話あるいは神話として読まれるべきものである。本書を含む浩瀚な五部作は、全体として、旧約聖書的な壮大な叙事詩となっている。（『シカスタ』上・下 サンリオ文庫より）

* ロマン派の時代の主な詩作品から

・ *An Island in the Moon* (William Blake, 1784-85) : 別章参照

・ *Xanadu* (Samuel Taylor Coleridge, 1797)

コールリッジが、アヘンを服用し、地理学者のR. ハクルートの影響を受けたサミュエル・パーチャスの航海集『巡航録』(Pilgrimage)を読みながら眠り込んでしまったが、目覚めて見た夢の中での出来事を55行程書き記したところで来客があり、書斎に戻るともはやそれ以上思い出せなくなっていた、と“*Kubla Khan*” (忽必烈:フビライ・ハーン)の序章で述べられている。聖な

るアルフ河の流れ、ロマンティックな溪谷、森林、幻想的な風景画 54 行の詩の中に交響曲が凝縮されているかのように詰め込まれている。モンゴル帝国の広大な大地の中に一世代を築いたフビライの叫びが聞こえてくるかのように詩は諸行無常の姿を著わしている。

2. ブレイクの喜劇性

ブレイクの作品を読む時、その作品のユーモア性や滑稽な登場人物というのは前面には現れていないというのがその印象である。初期の作品を代表する *Songs of Innocence and Experience* (『無垢と経験の歌』, 1789・1794) には微笑ましい姿を描いたもの(‘The Lamb’など)や高原にこだまする笑い声(‘Laughing Song’など)はあるもののユーモアを感じるものはない。しかしながら、表面的にはユーモアはないが、比喩的には全ての作品にユーモアが存在している。すなわち、諷刺である。ブレイクが諷刺的に作品を描くことによって、我々は批判的な目をもって社会的・人権的差別を行使している王侯貴族や上流階級の人々を嘲笑することができるのである。これこそ古代ギリシアの時代から受け継がれてきた喜劇のあり方である。

では、ブレイクの喜劇性はどの時点で作品として表現されたのかと言うと、先に述べたユートピア作品と同様のモチーフで描かれた *An Island in the Moon* (『月の中の島』, 1784 - 1785) が最も代表的な作品であると言えるだろう。次にこの作品の喜劇性について述べていきたい。

1969年、Martha England女史は、論文『ヘイマーケットで修行?』で、ブレイクの『月の中の島』をサミュエル・フットの『ヘイマーケットでお茶を』のパロディであることを論じたことで、『月の中の島』が漸く脚光を浴びることとなった。女史は『月の中の島』の構成を次のように分類した。

Act 1: 哲学者の家 (Chaps. 1-4)

数学者の書斎 (Chap. 5)

哲学者の家 (Chaps. 6-7)

立法者の家 (Chap. 8)

Act 2: 哲学者の家 (Chap. 9)

Interlude: 科学者の実験室 (Chap. 10)

Act 3: 立法学者の書斎 (Chap. 11)

この構成からも窺えるように戯曲構成になっており、3幕11章と幕間を含め7場面から成っている。主な登場人物はナレーターを除くと15名である。その中でも主要なのは3人であり、ブレ

イク自身とも言えるキッド(Quid: Cynic 皮肉屋)、ブレイクの弟ロバートと考えられるサクソン(Suction: エピクロス派)そして、シップソップ(Sipsop: ピタゴラス派)である。《※用語説明=・エピキュロス派: Epikuros (342 - 270 BC)の哲学を引き継ぐ派。原子論を学び、原子論的唯物論を基礎とする実践哲学である。目的は、幸福な生活の確保である。やがて、転意して、享楽主義、感覚的快楽主義、肉欲主義、肉欲耽溺、食道楽を意味するものとなった。・キニク派=犬儒学派(犬のような生活の意味): 幸福は有徳な生活にあり、有徳な生活とは外的条件に左右されない生活、強固な意志で欲望を制することによって達せられる、と言う考えに基づいている。非常に簡素な生活を唱道し、文明社会のしきたりや制度を無視し、そのため乞食生活を行うものもあった。今日、cynicismという語がこれにあたり、一般に世論、習欲、通常の道徳などを無視する生活態度を意味する。・ピュタゴラス派: 数学、音楽、哲学の研究を重んじた。西欧の思想としては珍しく、輪廻転生の考え方を有していた。宗教、道徳、学問、音楽などの統一的な解釈は、後のプラトンにも影響を与えることになった。奇数は有限、偶数は無限という考え方から、霊肉二元論となった。ブレイクこと皮肉屋キッドの台詞には次のようなものがある。「ホメロスは大ぼら吹きで、シェイクスピアは乱暴すぎ、ミルトンにはまったく感情が無い。彼らなんか簡単にやっつけることができるぞ。チャタトンはあのような詩は書かなかった。」このような批判の連続がいたるところに見られる。このようなブレイクの表現について、Northrop Fryeは、次のように述べている:「『結婚万歳』の非妥協的な女嫌いと、『世の墮落が始まったとき』における嫌悪の肉体的認識はスウィフトの伝統の中にあり、教養ある会話を洗練された猿どものおしゃべりにしてしまうブレイクの方はホガース的なグロテスクの扱い方を示している。」ここに出てくる Hail, Matrimony 『結婚万歳』は第9章でキッドによって歌われる歌であるが、その歌を歌う前にキッドはイタリアの歌などくたばれ、イギリスのをやろう、イギリスの天才ぼくが歌うぞ、と言って歌い始めるのである。ブレイクの自身が強く感じられる部分である。

以上のように、『月の中の島』でのブレイクの喜劇性はふんだんに見られるのである。次に、ブレイク作品全体から窺える『月の中の島』について述べることにする。

3. 喜劇としての『月の中の島』

推定ではあるが、『月の中の島』が書かれた1784年は、ブレイクにとってはかなり充実した時期であった。二年前に、キャサリンと結婚し、この年、パーカー (James Parker) と共にブロード街27番地で版画屋を始めたのであった。後に、ブレイクに靈感を与えてくれることになる弟のロバートも仕事を手伝ってくれていた。『月の中の島』は、これまで諷刺文学として考えられてきたわけであるが、この作品を諷刺文学として考えるためには、当時のイギリス社会を知る必要がある。イギリスにとってこの頃は、アメリカとの戦争が敗北という結果で終結し、ヨーロッパ諸国に敵対視されていた時期である。また、1784年には、「イギリス最初の空中飛行士」と言われるヴィンセンゾ・ルナルディ (Vincenzo Lunardi) が15万人のロンドン上空を飛び、ウエアに着陸した。当時、水素は、inflammable gas (可燃性ガス) と呼ばれていた。そして、この気球のために用いられる水素を供給してくれたのが、聖トマス病院の医師で化学者でもあったジョージ・フォードイスであった。ブレイクが、『月の中の島』を書いている頃に、このルナルディの乗った気球が、パンテオンに陳列され、「気球帽子」(Balloon Bonnet) が人気を得た。その時、「月」と「気球」(‘moon’ と ‘balloon’) の rhyme が流行し、加えて、‘Lunardi’ と ‘Lunatics’ が、掛詞としてよく話されたということである。『月の中の島』には、ブレイクの思想がよく表現されている部分がある。それは、第7章のQuid (= Blake) と Suction (= Robert) との会話の中にみられる。この哲学批判と感情肯定主義は、ブレイクの作品に限らず、彼以後のロマン派の精神にも相通じるものとなる。

さて、『月の中の島』には、『無垢の歌』の詩が、三篇収められていることはすでに述べた。ただ、『月の中の島』に収められている詩と、『無垢の歌』のものとは、必ずしも同じものとしてとらえられない点に注意しなければならない。その大きな理由は、読者の対象が異なる点にあると思われる。『無垢の歌』に収められることになる三つの詩は、全て第11章で歌われている。『無垢』の ‘Holy Thursday’ の原詩は Obtuse Angle (鈍角氏) によって歌われる。この Obtuse Angle は、その名の示す通り、物事を見通す力が無い頭の鈍い人物として描かれている。『無垢の歌』の詩と少々単語が異なるところがあるにしろ、内容は全く同じものである。何故、ここでこのよ

うな歌が歌われなければならないかという疑問は、この『月の中の島』では必要とはしない。この作品に登場する人物たちは、それぞれ自分勝手に自分の言いたいことを言っているだけなのである。大切なのは、Obtuse Angle が、その鈍さゆえに、子どもたちの外見的な姿だけを目にし、それを微笑ましく思っているということなのである。「昇天節」(‘Holy Thursday’) のような日でなければ、イギリスの下層階級の貧しい子どもたちは、天使のように崇めてもらえないという裏の意味には盲目なのである。この時、『無垢の歌』の Innocence は多義に渡るが、‘鈍い’ という意味で用いられていることになる。この作品では、この皮肉な役割をブレイクは Obtuse Angle に演じさせている。つまり、読者の対象が異なるからである。『無垢の歌』は、子どもの読者をも念頭に入れているのに対して、『月の中の島』では、世の中の「善」と「悪」をくまなく知りつくした大人が対象でなければならなかったからである。すなわち、『月の中の島』の読者は、「経験」を経た者ということになる。対象が異なれば、Holy Thursday の原詩は、『無垢』の歌にもなりうるし、「経験」を経た者から見た場合のように「皮肉の歌」にもなりうるのである。‘Nurse’s Song’ の原詩は、Nannicantipot 夫人によって歌われる。この詩も『無垢』のものと同内容的には同一のものである。ただ、この Nannicantipot 夫人は、鈍角氏の歌を聞いて、「それじゃ私も」という具合に歌い始める。彼女は社会的で活発な女性である。そのうえ無神論者である。ブレイクにとって、無神論者は社会悪と考えていい。偽善的な Holy Thursday の老人と同類の者である。彼女の歌う歌は、当然ブレイクによって批判されることになる。その時、ブレイクであるところの Quid は The Little Boy Lost の原詩を歌い出す。この詩は、後に『無垢の歌』に収められるものの、『経験の歌』に属するような反動的なものはないといえ、その歌の調子は悲しく陰鬱である。Quid が歌い終わると、しばらくの間一同は沈黙することになる。

以上のように、『月の中の島』の中でいずれ『無垢の歌』となり得る三つの詩は、それぞれの登場人物によって、『経験』をも想起させる一味違った趣きを醸し出しているのである。この『月の中の島』という作品で、一部原稿が欠落していることもまた重要なことである。この欠落は、単なる不手際によるものではない。ブレイクが、故意に削除したものと考えられる。主人公である Quid

とその妻との会話は、すなわち、ブレイクと彼の妻 Catherine ということであり、ブレイクが『月の中の島』の後に作りあげる Illuminated Books について述べている。“— then Illuminating the Manuscript” は Ur Hamlet に優るとも劣らない神秘の部分である。ブレイクは、自分の彩色版画の作成方法を一応書いてみたものの、彼が、『月の中の島』において、彼の手法についての言及を削除したからに他ならない。

今述べてきたように、『月の中の島』は、ブレイク自身の画家として、また詩人として、大きく飛躍する可能性と思想の基点となった作品である。第1章で、Inflammable Gass が発した “Your Reason” は、ブレイクの神話の「理性」の体現化された Zoa である Urizen にも通じる。戯曲の手法は、後期神話体系の手法でもある。登場人物の性格は、神話の人物のそれぞれの姿となって生かされる可能性を充分含んでいるからである。そして、なによりも、『月の中の島』の後に、彩色本として出版される『無垢の歌』の三篇の詩が、すでに登場していることは極めて意味深いことなのである。

4. まとめ：批判精神とナンセンス文学

諷刺を念頭に置き、人間性の意味を追求していたブレイクがナンセンス文学を書いたこと、諷刺＝喜劇を書いたことは意義深いことである。20世紀の詩人を先取りしていると言う意味においても、自虐的な笑いを求めたと言う意味においてもである。しかしながら、ブレイクの生きていた時代では、まだ、その文学性を理解できた文学者さえ極僅かだったのはあまりにも彼のセンスが先走りすぎていたのであり、ナンセンスとなってしまったと言えるであろう。悲劇の感情に憐憫を訴えるものとは違い、喜劇を享受できるということは、ナンセンスが理解できるということであり、文学に意味を求めることは、文学の面白さを理解できていないとも言えるであろう。ただ、知性が無ければそれもナンセンスである。そんな意味において、ブレイクの『月の中の島』は、現代であれば、受け入れられるのかもしれないが、おそらく、それを演出するのは至難の業である。

Quotations

- 1) In the Moon is a certain Island near by a mighty continent, which small island seems to have some affinity to England, &, what is more extraordinary, the people are so much alike, & their language so much the same, that you would think you was among your friends.

(*The Island in the Moon*, Chapter I)

- 2) The uncompromising misogyny of “Hail, Matrimony,” and the physical awareness of the repulsive in “when old corruption first begun,” are in the Swift tradition, and Blake's power of reducing cultured conversation to the chattering of sophisticated monkeys shows a Hogathian command of the grotesque.

(Northrop Frye: *Fearful Symmetry*)

- 3) ……then said Quid I think that Homer is bombast & Shakespeare is too wild & Milton has no feelings they might be easily outdone Chatterton never writ those poems, a parcel of fools going to Bristol—if I was to go Id find it out in a minute. but Ive found it out already—If I don't knock them all up next year in the Exhibition Ill be hang'd said Suction. hang Philosophy I would not give a farthing for it do all by your feelings and never think at all about it.

(*The Island in the Moon*, Chapter 7)

- 4) Upon a holy thursday their innocent faces clean
The children walking two & two in grey &
blue & green
Grey headed beadles walkd before with wands
as white as
Till into the high dome of Pauls they like
Thames water

(*The Island in the Moon*, Chapter II)

- 5) O father father where are you going
O do not walk so fast
O speak father speak to your little boy
Or else I should be lost
The night it was dark & no father was there
And the child was wet with dew

The mire was deep & the child did weep
And away the vapour flew
(*The Island in the Moon*, Chapter II: page 15)

“—them Illuminating the Manuscript.”
“Ay,” said she, “that would be excellent,”
“Then,” said he, “I would have all the writing
Engrav'd instead of Printed, & at every other leaf a
high finish'd print—all in three Volumes folio— &
sell them a hundred pounds apiece. They would
print off two thousand.”

(*The Island in the Moon*, Chapter II: page X)

The Island in the Moon

(『月の中の島』) の登場人物

Quid the Cynic : Blake himself
Suction the Epicurean : Blake's brother Robert
Sipsop the Pythagorean
Etruscan Colum the Antiquarian : minister John
Brant
Mrs Gimblet
Inflammable Gass :
Mrs Gibble Gabble his wife
Obtuse Angle: James Parker (neo-Platonic
philosopher)
Steelyard the lawgiver : John Flaxman
Tilly Lally the Siptippidist
Aradobo the Dean of Morocco
Miss Gitipin
Mrs Nannicantipot
Mrs Sistagatist (Mrs Sinagain)
Little Scopporell
[Narrator]

参考文献

Digby, C. Wingfield. *Symbol and Image of William
Blake*. London, Oxford, 1957.
Dumber, Pamela. *William Blake's Illustrations to
the Poetry of Milton*. Oxford. Clarendon Press,
1980.
Erdman. David V., *Blake: Prophet Against Empire*.
Princeton, Princeton Univ. P. . 1954. Revised
1969.
Frye, Northrop. *Fearful Symmetry: A Study of
William Blake*. Princeton Univ. P., 1947.
Reprint 1974.
……. *Anatomy of Criticism. Four Essays*.

Princeton, Princeton Univ. P., 1957.
Gilham, D. G. *William Blake*. Cambridge.
Cambridge U.P.. 1973.
Mellor, Anne Kostelanetz. *Blake's Human Form
Divine*. Berkley. University of California Press.
1974.
Raine. Kathleen. *William Blake*. (Writers and their
Work No.12). London. The British Council.
1951 . Longmans.Green& Co., 1969.
……. *Blake and the New Age*. London. George
Allen & Unwin. 1979.
*William Blake: Songs of Innocence and of
Experience*. Oxford University Press. London
& New York in association with The Trianon
Press. Paris. 1982. ed. G. Keynes.
Poetry and Prose of William Blake (The Centenary
Edition). Edited by Geoffrey Keynes. Complete
in One Volume. London: Nonesuch Press,
1927.
Selected Poems of William Blake (Poetry Bookshelf).
Edited with an Introduction and Explanatory
Notes by F. W. Bateson. London: Heineman,
1957. Reprinted with Corrections, 1961 .
The Poetry and Prose of William Blake. Edited by
David V. Erdman. Commentary by Harold
Bloom. N.Y. , Doubleday, 1965.
Blake: Complete Writings with Variant Readings.
Edited by Geoffrey Keynes. London: Oxford
U.P., 1966.
The Poems of William Blake (Annotated English
Poets) . Edited by W. H. Stevenson. Text by
David V. Erdman. London: Longman, 1971 .
William Blake's Writings. Edited by G. E. Bentley,
Jr. 2 vols. Oxford: Clarendon Press, 1978. Vol.I.
Engraved and Etched Writings, Vol.II . Writings
in Conventional Typography and in Manuscript.
Blake's Poetry and Designs. Authoritative Texts
Illuminations in Color and Monochrome.
Related Prose. Criticism (Norton Critical
Editions) . Selected and Edited by Mary Lynn
Johnson & John E. Grant. N. Y. ; Norton. 1979.
Damon. S. Foster. *A Blake Dictionary: the ideas
and Symbols of William Blake*.
Thames and Hudson Ltd. . London. Reprinted.
1979.
Ruth Nevo. *Comic Transformations in Shakespeare*
London and New York: Methuen, 1980.

- The Poems of John Milton*. ed. John Carey and Alastair Fowler. London and New York. Longman. First Published 1968.
- William Blake*. Bokushinsha. [『ウィリアム・ブレイク』 牧神社] 1977.
- William Blake: Essays in honour of Sir Geoffrey Keynes*. Edited by Morton D. Paley and Michael Phillips. Oxford, at the Clarendon Press, 1973.
- アンリ・ベルクソン『笑い』(*Le rire*, 1900)
林達夫訳 岩波書店 第41刷1983。
- シーザー・L・バーバー『シェイクスピアの祝祭喜劇』玉泉八州男・野崎睦美訳 白水社 1979。
- ジョゼフ・キャンベル著『神話のイメージ』
青木義孝・中名生登美子・山下主一郎訳
大修館書店 1991。
- 阿部知二著『世界文学の歴史』河出書房新社 1989。
- 新井明・丹羽隆子・新倉俊一編『ギリシア神話と英米文化』大修館書店 1991。
- 出隆著『アリストテレス哲学入門』岩波書店 1980。
- 高橋康也監訳『世界文学にみる架空地名大事典』講談社 1984。
- 田中美知太郎著『アリストテレス』(世界の名著 8) 中央公論社 1979。
- 土屋繁子『ブレイクの世界』研究社 1979。
- 松島正一『孤高の芸術家 ウィリアム・ブレイク』北星堂] 1984。
- 松平千秋訳『世界の文学—古典文学』集英社 1990。